慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十年三月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第一九〇号）

目次

一切衆生悉有仏性（二）……近角常観……(2)
蓮如上人聞書について……花田正夫……(6)
一道会の記（続）……榊原徳草……(10)
人生航海……高原憲……(19)

第十七巻　第三号

池山先生筆　名号碑

碑の裏面

一切衆生悉有仏性（二）

近角常観

なお続けて『涅槃経』の次の文を拝読すると、

大慈大悲は名けて仏性と為す。仏性は名けて如来と為す。大喜大捨を名けて仏性と為す。何を以ての故に、菩薩摩訶薩は若し二十五有に能わず、則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ること能わず。諸の衆生、畢にまさに得べきを以ての故に、是の故に説て、一切衆生悉有仏性と言えるなり。

此の文を読むと、仏性は如来の大喜大捨が仏性である。それは如来に成りての上の事である。菩薩摩訶薩でも二十五有に至らなければこれを得る事は出来ぬ。況んや我々迷いの世界に於て、到底この大慈大悲を得ることは出来ぬのである。それがこのたびお慈悲を頂く一つで、この広大な徳益が得させて貰える。それ故に一切衆生悉有仏性であるとお説き下されたのである。又続けて拝読すると、

大喜大捨は即ちこれ仏性なり。仏性は即ちこれ如来なり。仏性をば大信心と名く。何を以ての故に、信心を以ての故に、菩薩摩訶薩は則ち能く檀波羅密、乃至般若波羅密を具足せり。一切衆生は畢に定めて当に大信心を得べきを以ての故に、是の故に一切衆生悉有仏性と言えるなり。

大信心が仏性である。一切衆生この信心を得ることが出来る故に、一切衆生悉有仏性であるとお説き下されたのである。我々聖道門の修行では、心の中に少しばかりの光が顕れたのを仏性などと言うて居るなれども、浄土門においては他の事はない、大信心が仏性である。信心を得れば、菩薩摩訶薩の檀波羅密、乃至般若波羅密、其の他一切の功徳が、此の信心に具つて居る。この故に信心を得ることが、一切衆生悉有仏性である。一切の衆生は、信の一念に、未来浄土に参りて一切衆生を済度するこれ等無量の徳力を得るのじやとお示し下されたのである。

話が前後しますが『諸経和讃』の中には、

如来すなわち涅槃なり、　涅槃を仏性と名けたり
凡地にしてはさとられず　安養にいたりて証すべし

其仏性は何時現れるかというに、弥々極楽に参りて、仏に成った時が仏性の現るる時である。それまでは、此の世に居る間は仏性の現るる味いはさとられぬ。浄土に参りて

それがあらわれ、極楽に参りて、初めてそれが実行させて貰えるが、その広大の力はいつ得るかというに、信心を頂く一念に、その力は得させて貰うのである。南無阿弥陀仏を得させて貰う時に、その衆生済度の力は得るのである。又、

信心よろこぶその人を　如来とひとしとときたまう
大信心は仏性なり　仏性すなわち如来なり

信心喜ぶ者を、仏は如来と等しいとお説き下されてある。如来と等しき如き広大の身として頂き、生々世々の父母兄弟一緒に浄土参りが出来る如き広大の仕合せは、何時得るかというに、別々に得るのでない、信心の一念に、一度に得させて下さるのである。

今日は大層、経文を読みますが、これ等の文が、親鸞聖人が、唯仰せられるのでない。『信巻』今の『涅槃経』の文の直ぐあとにお引きなされてある『華厳経』の文に

華厳経に言わく。此の法を聞いて信心歓喜して疑い無き者は、速に無上道を成らむ。諸の如来と等しとなり。如来のお慈悲を頂き、疑いなく歓ぶ者は、速に無上道を成る。ここになると『華厳経』の文なれども、『大経』第十八願成就の文と、全く同様である。

「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜乃至一念せん。至心に廻向したまえり。彼の国に生れんと願ずれば、即ち往生を得」

という文と全く同意義である。如来本願の法を聞き、信心歓喜して疑い無き者、至心信楽己を忘れて喜ぶ者は「速に無上道を成らむ」必ず仏にして下される。斯くなる上は「諸の如来と等しきなり」――信心喜ぶ者は、此の世に居ながら、既に如来と等しき身分じゃぞとお示し下されたのである。又『和讃』には、

他力の信心うるひとを　うやまい大きに慶べば
すなわちわが親友ぞと　教主世尊はほめたまう

此の和讃なども一寸意味が取り難い。他力の信心うるひとを、即ち我が親友ぞと、教主世尊はほめ給うのである。他力の信心うる人は、其人が如来の慈悲を頂き、敬い慶ぶ故に、その人を吾が親友ぞとほめ給う。「信心よろこぶその人を、如来とひとしとときたまう」と同様である。又、先程申した「如来すなわち涅槃なり」の和讃の聖人の御左訓で言うと、

如来トマフスハスナハチネチハントマフスミコトナリ。ネチハントマフスハ、マコトノホフシントマフス仏性ナリ。シルベシ、コノボンブ、コノセカイニシテサトラズ候ヘバ、他力ヲタノミマイラセテ、アンラクジヤウドニシテサトルベシ、トナリ。

仏性を悟らせて貰うは、安楽浄土に往生した時、悟らせて

貰うのである。この凡夫が、この世で他力の信心を頂けば、未来必ず安楽浄土に往生して、この広大の悟の境界を開かせて貰う。故に、

「信心慶ぶその人を、如来と等しと説きたまう」
「吾が親友ぞとほめたまう」
「大信心は仏性なり」

である。然らば、この身に、この仏性があるのかというに、然うではない。此の身の上は、我等はいつ迄も悪業の凡夫である。悩み苦しみの此のお互に、仏性などが有るもので無い。それが如来の遺る瀬なき本願のお慈悲一つが届いて下さる一念に、この広大の御利益を得、この悪業の仕方のない者が極楽浄土に往生する。一切の衆生に仏性が有るというも、この如来廻向の御信心を頂く事が仏性であるとお示し下されたのである。

なおすこし続けて『涅槃経』の文を拝読すると、

大信心は即ち是れ仏性なり。仏性は即ち是れ如来なり。仏性をば一子地と名く、何を以ての故に、一子地の因縁を以ての故に。菩薩は則ち、一切衆生に於て平等心を得たり。一切衆生は畢に定めて当に一子地を得べきが故に、是の故に、一切衆生悉有仏性と言えるなり。一子地は即ち是れ仏性なり。仏性は即ちこれ如来なり。

今迄と同様のお示しである。この如来広大のお慈悲を喜ぶと、一子地の果報を得る身として頂いたのである。『和讃』で言うならば、

平等心をうるときを　一子地となづけたり
一子地は仏性なり　安養に到りてさとるべし

この平等心の御左訓には、

ホフシンノ心ヲウルトキナリ。

又、一子地の御左訓には、

三ガイノシユジヤウヲ、ワガヒトリゴトオモフコトヲウルヲ、イチシヂトイフナリ。

一子地と云うは、三界の衆生を真に可愛いと知らせて貰い、誰も彼も、我が一人子の如く、悉く可愛いと思えるようになった時を一子地という。この罪深きお互は、親も子も乃至兄弟、朋友も救う事が出来ぬ。そのものが如来廻向の広大な恵み一つを頂くにより、この我が命終るに於ては、即ち「一切の有情は皆もて世々生々の父母兄弟なり。いずれも〳〵この順次生に仏になりてたすけ候べきなり」――ありとあらゆる衆生、即ち三界の衆生を、一人子の如く思い、これを救う事の出来る大悲平等の力を下さる。この広大のお力を頂くの故、一切衆生悉有仏性であるとお示し下されたのである。

斯く話する間に、段々『歎異鈔』の思召しを喜ばせて頂

くことが出来る。即ち、四章より五章に移りて、

親鸞は父母孝養のためとて、一辺にても念仏もうしたることいまだそうらわず。そのゆえは、一切の有情は皆もて世々生々の父母兄弟なり、いずれも〳〵この順次生に仏となりてたすけそうろうべきなり。わがちからにてはげむ善にて仏をもうしそうらわばこそ、念仏を廻向して父母をたすけそうらわめ。ただ自分をすてて、急ぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあいだ、何れの業苦にしずめりとも、神通方便をもてまず有縁を度すべきなりと云々。

の仰せがまたここである。人の力で及ぶことなら、我々親孝行はしたい。「吾が力にて励む善にても候わばこそ、念仏を廻向して父母をたすけ候わめ」……念仏称えて親が救えるなら、我々が称えて親が救える念仏なら、如何なる道も取りて見よう。けれども我々の力は間に合わぬ。この世に居る間は、自分の力は一分一厘も及ばぬ身である。一声称える念仏と雖も、これこそ真に恵みばかり、我が方よりはたとえ親の為とは言え、一分一厘も働きて見ようの無き身の上である。それ程の浅間しき私に、親より回向の南無阿弥陀仏の六字の恵み、如来より下さる大信心は、この世の父母兄弟のみならず、生々世々の父母兄弟を一子の如く救える広大の身の上として下さる。これを平等心といい、一子地という。この平等心、一子地業は、極に往きてあらわれるのじやとお示しされたのである。

未完

盲目の子

（求道用心集）

一因に書す。盲目と雖もまことの子は他人の愛に勝る事。
一盲目の子は、親の憐み目明きの子に勝る事。
一盲目の子は、附きそう親を力にするより外これなき事。
一盲目の子は、子は見ざれども親は常に子を見る事。
一盲目の子の飛び廻るを案ずるは目明き子の飛び廻るに同じからざる事。
一盲目の子の親を呼ぶに、親直に傍に来る事。
一盲目の子は親は着実と思いながら疑い深き事。
一盲目の子は親より賜るものを見ること能わざる事。
一盲目と雖も大王の子ならば百官群臣みな敬重する事。

信を得た者も盲目、信を得ぬ者も盲目・盲目の子を親がながむる如くなること盲目なれば、目をあけたいおもいなし。

目の見えぬ子は、目の明らかな人の側を離れぬようにする外は怪我せぬ道理なし。

『香樹院随筆』

蓮如上人聞書について

花田正夫

大分前のことでありますが、近角先生の『慈光録』の中に、御尊父の常随法師が、真諦の上には歎異抄を精読され俗諦の上には蓮如上人の御一代聞書を大切に身読せられたことが誌してありました。それからは及ばずながらも私も御聞書を時々拝読してまいりました。

然しそこに知らされます蓮如上人の御生活は、私共の及びもつきませぬものばかりで、読みながらも息切れがして自然に書物が重くなって、しばらく御遠慮申すという風な勝手気ままを続けてまいりました。

最近になつて、とにかく自分の生活の如何を問わず、否駄目な私なればこそ、上人の仰せを先ずくりかえして拝読しようという心になりました。聞書の第五十四条にも、

「御一流の御こと、この年まで聴聞申し候うて、御ことば承り候えどもただ心が御ことばのごとくならず」

という法敬坊の述懐もありますにつけ、御ことば通りになれぬ私こそいよいよおことばを常に繰り返すことの大切さが知らされました。

さてこうした心から今年の初頭から拝読し始めましてから、第一に知らされますことは、自然の感化の大切さということであります。姿勢を正してよく聞けといった風な四角四面の場でなしに、日常茶飯時に、別に聞きたいとも思わず、又話す人も教えようなどと思わぬ状態の時に、不図した機縁でもらす言葉が、その後忘れてはならぬとつとめるのではないが、何時までも聞いた人の心の底に残って、なぐさめとなり、力づけとなり、灯火となっていくものであります。これに反して作為の感化というものは水面に描く絵のようにはかないもので、こちらが優位の時にだけ相手は従っている振りをいたしますが、ひとたび劣勢となると逆転してしまいます。そういうことを何度積み重ねましても、所謂蹇の河原の石積みの空しさの繰り返しに終るのであります。

六十の坂を一つ越えます今日、小学校の時から今まで教えて頂いた沢山の先生方のことを思い浮べます時、一生懸命に教室で長時間教えられ、私自身も試験だといえば血眼になって学んだ学科というものはほとんど忘れてしまいましたが、何かの機縁で、通学の途中とか、放課の時間など

で先生から不用意に聞かされた言葉とか所作の断片が鮮やかにのこって居ります。さてそこに、不用意の間に出る言動の大切さというものを知らされますと共に、不用意の間に出るものは、着物を脱いだ素地でありますから、その素地を大切に養うことの大切さが省みさせられるのであります。

御一代聞書を拝読しますと、蓮師が随時随所に身近かな人々にもらされたお言葉や所作が、自然に深く刻まれて、聞きとられた人々の生涯の灯火となり暖炉となり滋養となり背骨となっているのに驚嘆させられますと共に、このような金言は、私自身深く広く蒙らねばならぬと、身はすでに老人と呼ばれる今日痛感させられることであります。

あくことを知らず　（法・二三一条）

①物にあくことはあれどハ仏に成ることと、弥陀の御恩を喜ぶことはあきたることなし。

②焼けども失せぬ重室は南無阿弥陀仏なり。然れば弥陀の広大の御慈悲殊勝なり。

③信ある人を見るさえ尊し、よく〳〵の御慈悲なり。

①

白井成允先生が、お母堂様を亡くせられた時「天なり命なり」という儒教にやすらぎを得られず、更に聖書をひもとかれましたが「信ずるものはすくわれん」との教はあっても亡き御母上様の救いの道は見出し得られなかった時、三好愛吉先生をお訪ねになって、心中を打ち明けて教を乞われた時、

「それでは仏法を聞きなさい。それについて近角先生が毎日曜求道会館で講話をしていられるからそこで聞きなさい。然し近角先生は同じ話を何度でも繰り返して話されるが、それをただ覚えたというだけではいけない。何時もくり返されるいつもの話が、いつも新らしく聞けるようになるまで聞さなさい云々」

と勧められた由であります。これはまことに有り難いお言葉と思います。私共が仏法を学ぶにあたり、単なる知解にとどまる限り、あれも知っている、これも分ったとなっていつも新らしいこと珍らしいことを聞きたがるものであります。儒教で「論語読みの論語知らず」とは、頭でだけ知って、行動にならない状態をいましめられたものであります。

又清水凡禿さんの法悦抄にも、書画が本物かどうかを知るには、毎日座敷に掲げて朝夕に見ていると、偽物は飽きがくるが、何時まで見ても見飽きのしないものは本物だ、という骨董屋の話がのせてあります。

まして仏の真実の心に触れる者にとって、私如き下機のやからが成仏させて頂けることと、その御恩の広大さはきれば いよいよかたく、仰けばいよ〳〵高いことで、私共としては、知れはじめ、聞きかじりと何時も申すほかはないのであります。

或御講師は、

「毎日頂く食事で、お飯はなくてはならぬものだが、今日は御馳走だったと人々がよろこぶのは、肉とか魚とか珍味の品である。然しどんな好きな鯛の刺身でも三日と続けるともうあいてしまう。御飯だけは三度が三度いくら続けてもあくことのない御馳走である。念仏にこの味が知れるとよいが……。正信偈の勤行でも、正信念仏偈、又は念仏正信偈とあるように、大切なのはお念仏であるのに、人々が怠屈するのを憐んで和讃を念仏の間に挟んで読誦するようにしてあるのに、念仏がつけ足しで、和讃が主のように思い勝である云々」

と説かれたことも、私共の心の盲点をついての御教と思います。

②

御伝抄に

聖人、弘長二歳仲冬下旬の候より、いささか不例の気ましまします。それよりこのかた、口に世事をまじえず、ただ仏恩の深きことをのぶ。声に余言をあらわさず、もはら称名たゆることなし、而して、頭北・面西・右脇に臥したまいて終に念仏の息たえおわんぬ云々」

とありますが、池山先生は、地上最後の言葉として

「何ものこるものはない〳〵。

ただ念仏だけがのこつてくれる。

ありがたいこつたよ、えらいこつたよ」

と述べられ、それからは、ただ念仏の声のみで、念仏の息たえ終られたのであります。

法華経に「火中の蓮」という有名な一句があります。火とは煩悩であります。煩悩の火にやけぬ蓮華としての仏法を讃えられたものであります。

善導大師は「水火二河の白道」の譬えをもって、貪欲の浪、瞋恚の火におかされず焼けぬ念仏の徳をたたえられました。

聖徳太子は、内憂外患の嵐の中の日本にあって、「世間虚仮、唯仏是真」とお家庭内で常に仰せになつていられましたことは万人の知るところであります。

親鸞聖人が「念仏者は無碍の一道なり」と信嘗されましたことも「ただ念仏のみぞまこと」と述懐下されたことも九十年の御生涯、幾山河を越えに越えられた上での信味でありました。

この聖語をとおしまして、「真実の重室」を教えられるのであります。私共は消えてなくなるものを真実の重室と

思いこんで、それにうつつをぬかして居りますが、これを警告する小説に、モウパッサンの「虚栄」という一篇があります。友人の持つていた真珠の首飾りを借りて夜会に出席してそれを失つて以来、これを買うのに莫大な借金をして、その跡始末に二十年の月日を過したのち、そのことを友人に打ち明けると「あれは偽せの真珠だった」と知らされ、二十年間の無駄骨折にすでに頭髪も白くなった身を唖然として歎く、という筋のものでありました。

宝の山に入つた人生で、手を空しくして終らぬようにとの切々たる悲心が、「火にも焼けぬ重宝は南無阿弥陀仏なり」との仰せであり、それをお知らせ下さる弥陀仏の広大無辺な御恩は謝しても謝しつくせぬことであります。

良寛師の

「ぬす人に取り残されし窓の月」も思い併せられることであります。

③

「信ある人を見るさえ尊し、よく〳〵の御慈悲なり。」

私が田舎の中学を卒えて六高に入りました時、担任の教授が池山先生であられました。それから先生に接するようになりましてから、こんな先生は今までに遭つたことがない、先生は本当に人格者だと私共は皆尊敬して居りました。そうした頃先生をお訪ねして「先生のような人格者にはまだ一度もあったことがありません」と申しますと、先生は苦笑されながら「人格者という中に無為無能の者への呼び名があるが、そうした意味の人格者としての資格は十分にあるが君の言うような人格者ではない。それは他人が何というとも自分でよく知らされている。ただ人と違つた点を言えば、自分のような浅間しい人間にお念仏を頂いているだけだよ」と答えられ、静かに念仏して居られました。

ここで私は夜空を照らす明月の輝きを見た。それは月自体には光を放つ力はないが、太陽の光りを身にうけ、そのまま回光返照して地球上に光を放つている姿であります。

無慚無愧のこの身にて　まことのこころはなけれども
弥陀廻向の御名なれば　功徳は十分に満ちたもう

の聖人の御和讃をそのまま仰ぐことが出来ますのも、こうした先生のお導きによるのであります。

未完

一道会の記（続）

榊原徳草

白井先生のお話に続いて石川興二先生は次のように語られた。

私には深い信仰はまだないが、只今松江師と池山先生の御令息の御話に出た岡山中学に私は入学し寄宿舎生活だつたが、池山先生の御宅は池の端にあつたことを覚えている。それから岡山高等学校に入つて先生との因縁が事実として私に結ばれた。その時分の先生はお子様達を大変可愛がつておられるのを見たことがある。

先生を憶うて言わざるを得んことが、いつもここへくるがそれは高等学校へ入学してから母が突然亡くなつたことである。母の父は金沢藩士だつたが真宗の信者で俗人ながら聖人の教行信証も読んでいた人である。この父の子である母は、財産は何にもならぬ、子供には身についた教育をせねばならぬとの信念のもとに、女中もやめ無理をしてまで私達二人の兄弟を高校から大学へ進ませた。

この母の死にあつて私は人生に大きな挫折を感じた時、高校時代の親友岡本一郎君に縷々煩悶を訴えたが、その友の返事に「池山先生に会え」とあつたのである。先生をお訪ねしてお話すると先生は「歎異鈔をお読みなさい」とただそれだけ言つて下さつた。歎異鈔はうすつぺらな本だつた。

先生は岡山高校の授業にカーライルの「権利のための闘争」を講読して下さつた。内容は、この世は自我の闘争の場であることを教えたものだつたが、これを講読される先生の口は常に念仏が唱えられていた。

またお正月の宴会の時大いに先生等と飲んだが、その時の先生の念仏は流れるようであつた。

或る夏、私は海水浴にいつていた。そこへ先生から電報がきた、近角先生の御法話を聞かせようというのである。先生の奥様が胃癌でお別れの法話会のときのことであつた。

大正三年京都大学に教師として入つたが、好きな学問はしても真宗からは離れていた、外国留学から帰朝し教授となり経済学を受持つた。その頃ある法科の学生が「先生、池山の父が会いたいと云つています」という。この学生は先生の御子息で川西家へ行かれた方だつた。

蓮華谷のお宅へ間もなく先生をお訪ねしたが、これが京都へ来てから始めてだつた。その時の先生の態度は春風台蕩たるもので、大きな先生の愛情を身に感じた。これから「一つの会」に毎年出席したが、数年して先生の死に遭うことになつた。

それからもう一つは、先生から独訳歎異鈔を頂いたことである。「ただ歎異鈔を読め」とてこの独訳も頂いたわけである。

私は歎異鈔と学問的に取組んだのである。現世を仏教精神で生きる、これが異端であつても、そういう風に私は仏教に接する。経済の世界は「物の闘い」の世界で、人間が肉体と精神をもつている限りこれも大事である。経済は社会悪の世界だが、これを通さねば人は生きられない。そのままにしておけば争いの世となるのみ、これが経済である物の世界である。弥陀の慈悲は一切を包み摂める、従つて経済の世界もそれになつていく。この意味では経済世界は弥陀の還相的世界である。

仏の教によつて我々は自我を越える、越えていつた所に社会・親・子があることがわかつてくる。仏教は遇然に生れたのではない、東洋の支那では「農」が中心で、これは儒教の教える所。農とは共同体を基本としている、家も国家も皆共同体であり、共同生命の場である。この共同体「家」「国家」の自覚が東洋思想の根本で、私をしていわしむれば、仏の教は内に出家して一切に生きることである、キリスト教は外にあるが、仏教は内にある。釈尊は単に来世を説いたのでない、現在を、今日を生きる教えが仏教である。現在中国は原爆をあげた、東西の対立抗争は劇しい、恐るべき世界に我々は生きている。今日釈尊が居られるなら、じつとして居られぬだろう。池山先生に植え付けられた仏教の根は、現代に生きることを教えるものと信ずる。

私は京大を停年退職してから現在は京都女子大学に奉職しているが、女子大の学則の第一条に「仏教精神を生かし云々」とある。これを現代に生かせたい。現代とは国家主義時代でなく、大乗精神は世界に対して考えねばならぬ、自国日本を越えて慈悲の世界に生きねばならぬ。新憲法に世界に生きる、他国を無視してはならぬ、とある。

トインビーもキリスト教は偏狭であり対立的であると云い更に大乗精神以外にはないという。親鸞の道を生きる、これは私が池山先生に植えつけられた根である、これは現世のためであると思う。微力を尽しこれに励みたい。

（註）古稀を越えた石川先生は、恰も青年の如き情熱をこめて、現代を生くべき仏教精神を活気横溢、長時間お話下さつた。

ここで暫く休息して皆様に緊張をほぐして頂いた。午后四時、再会、向島先生のお話である。

私は先輩の故をもつて沢山の法友がおられる中で今壇に上らされました。別にまとまつた考えもないが、先程「城が島」の歌のレコードをききつつ、あの昔を偲んでなつかしく思いました。学生時代、花田先生を中心に親鸞会を結んで、蓮華谷の先生のお宅でこの歌を一諸にみんなして歌つたものです、もう三十年も経ちました。今日もその時代の友の二三とここで会い、一度離れても、念仏の一条の糸でまた会う、感無量であります。大先輩の前で懈怠の私だが感懐の二三を述べます。

さて松江師、御子息、石川先生と次々お話を伺つて申すこともありませんが、オリンピック大会も始つて、つかの間にもう終つた。四年前から待ち、あと百日など云つている間に大会となり、もう終つてしまつた。御令息が先程、「時は立ち停らない」と云われたが実にその通りである、こうして時は流れ、来るべきものがきつとくる、自分の死が来る、自分の死など遠い先と思つているが、過ぎた三十年も何時の間にか過ぎ去つてしまつた今日である。いつか私に私の死がくる、目前に現れてくる、自分の此世の終末がくる、確実に自分の死がくると痛切に感じるのです。石川先生のお話に、仏法は現世の法と云われたが、然し死の問題も大事である。むしろ生死の場が仏教の中心でなければならない。寺に参ると死のことばかり云う、然し生死こそ一大事である。何時来るかわからないが、確実に必ず来る、この死に対して解決せねばならない我々である。

もう一つ御令息が言われたように、現在は時々刻々に遷り変つていく。オリンピックがと言つている間に終つてしまう。フルチショフが世界の一方の旗頭だつたが俄に突然消える、中共が原爆をあげる。これらは劇しい遷り変わりであり、それらを通じて無常ということを教えられる。

私は最近母がたの叔母が胃癌で亡くなり、次いで従兄がこれまた胃癌で余命幾許もない。何時までも同じ姿では居られぬことに胸打たれる。かかる場合に聖人の仰せ「よろずのこと、みなもてそらごとたわことまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」の一句が胸に泌みてくるのであります。最後にのこるものは念仏のみと痛感するのであります。善悪正邪を考えるのも、それは短い生命の間のことである。

池山先生御往生の年令に間近い私なのに、いい加減に悟つたらいゝのに愚痴ばかり言つておる、どうにもならんと分つておりつつ計らいをめぐらして毎日生きる外ない。「煩悩具足」の仰せの通りです。現世の息の絶える瞬間までこれは続くのでしよう。然しそれらの全部が一声の念仏

の中に吸いとられていく。池山先生が常念仏されている。先程「苦しい時に念仏」といわれたが、実際苦悩の中に念仏が現れて下さつて吸い取つて下さる、それが現状のままの救いとなるのです。

そこで一切の問題は「我執」一点に集中してくる。自己にとらわれない世界に出るのが根本精神であるが、どうしてそれに出られるかが問題である。私はかつて或る会の前に、池山先生に、有限と永遠の問題を書いたものをお見せした所、先生は「その通りである、ただ君の心がその通りにならないだけだよ」と言われました。宗教の世界は理論で解けない、生命の根幹になるものが宗教であります。我執を無くするのが仏教であります。どうして無くするか、聖人の「ただ念仏」一つでそれが出来る、我を無くする実践が念仏です。池山先生の「ただ念仏」です。この念仏の背後にある大きな力に動かされて念仏された先生であります。念仏の中に包まれておられる先生、先生の生活はそういう御生活でありました。われ〳〵もそのように生きた念仏の中へ住みこむようにしたいものと此頃切に思うのであります。

次ぎに松本先生が話されました。

先生御往生の後廿七年を迎え午前には名号碑除幕式が行われまして感慨深いものがあります。向島さんの云われたように何も加えるものはありません、石川啄木の歌「故郷の山に向いて言うことなし、故郷の山はありがたきかな」ですが、駄足一言申します。

池山先生或時の講演に、念仏には三つの段階があると仰言つたが、そのお話のはじめのところで、

「我が日本はいかなる田舎、津々浦々に至るまで念仏を知らぬ者はない。私も少さい時、後で出されるお菓子を楽しみに、大きな珠数を繰り〳〵声張り挙げてお念仏申したことがあつた」

とのお話でありました。

私は青森の真宗寺院に生れ、念仏の中で育つたが、従来聞いた念仏は頼りにならない暗い念仏でした。今日若い者は念仏は縁起が悪いという。これは昔からで、あの日支事変が始つて出征兵士を送る時、親鸞会の岡野君が南無阿弥陀仏の幟りをたてて送つた。その時、縁起でもないことをする人と云つたことです。

池山先生・親鸞聖人・法然上人の本当の念仏はそうでない、真実の念仏はそうでない。池山先生の念仏には明るさ・力・たのもしさが感じられてくる。そういう念仏でありました。私は京都大学卒業以来、十年更に二十年を経た今日、先生の念仏の明るさを愈々感じるのであります。一緒

に「城ケ島」を歌うその中に念仏が明朗に光つている、たのもしさがただよつている、そういう生命の輝く念仏であります。

白井先生が業についてお話下さつたが、これは信生活にあつては深い問題であります。「さるべき業縁の催し」によつて、こうして今日吾々が集つていることは間違いない。

池山先生の御生涯も然りで、業縁の中にあつて、併もその業縁に悩みぬかれたお生涯であられたが、その半面、念仏の力強さによつて生き抜かれ、そこから明るさが如来の御催しによつて与えられておられたのであります。業の深さの半面に明るさに生きる、一種洞然とした生涯が恵まれて居られました。これは先生の常に仰せになつた「念仏の自動作用」の然らしめた所であります。力強い念仏、明るい念仏、綜合して頼もしい念仏、たのもしさがあるのであります。

石川先生は仏教は現在のもの、未来のものではないと云われたが、未来というと問題になるかも知れませんが、業縁の中を歩むとき、自力無効と知らされ、煩悩世界が転化してたのもしさが出てくる、自力無効・煩悩熾盛の世界に住むその者のための念仏とわかつた時に、転化の妙用・念仏の自動作用はたのもしさとなつて出てくるので、現在の救いの中に未だ来らざるもの、未来が出てくる。即身成仏ではないが流れ来るもの一切が信生活自体が流れのままに力強い明るい、綜じて云えば流転のままの中にたのもしさが湧いて出てくる、それがお念仏であります。

先生御往生遊ばされて二十七年の忌を迎えますとき、明るい力強いたのもしい念仏で先生に深く謝するものであります。

次に、四国から来られた、玉尾先生は、六高時代から先生に導かれた方でありますが、初めて今日一道会に出られてひとしお感慨深げに、静かに、自己に語るが如き姿で大要左のお話があつた。

私はここに立つて何も申上げるものを持たないのです。ただ、今日来てよかつた、という感じで一杯です。先程からそう思つて居ります。

先生は六十七才で亡くなられました。その年の十一月二十八日の追悼会に参つたきりで、それ以来今日までこうした会には参つておりません。本当に今日は参つてよかつたとそう思います。

私に対する好き人は増那寺の御院主が最初です。小さい時、祖母に連れられてお寺参りをしました、坊さんになつたらと思いました。御院主は、まあ中学へやつておけ、

と両親に言われ、中学に入つて三年の時、父が死亡しました。それから医者になろうと決心しました。そして岡山の六高へ、そして親鸞会に入り、ここに居られる花田兄、北岡兄と知るようになり、池山先生に遭い、授業でドイツ語を習う一面、親鸞会で先生の念仏に遇うたのであります。考えてみますと「発遣の御院主、招喚の池山先生」であります。

岡山医大では生理学の生沼教授、学生主事の千輪清海先生にも御縁を結びましたが、或る夏休暇に学友三人で勉強かたがた広島の三原の仏通寺へ参り、夜は若い雲水と一緒に二週間坐禅しました。それから京都の管長さんの前へも参りました。現在私の息子が岡山医大をすませて三原の赤十字病院へ勤めていますが、今年の夏は懐しさの余り三原の仏通寺へ参つたことであります。

私は先生の追悼録「呼子鳥」にも歌をかきましたが

「無字一つ今に解き得ぬ身はさびし一山川のしづく下かげ」

の歌の通りで、鈴木大拙先生のような禅の宗匠のお話を聞いても、聞いた所ではその心になれません。……。

よき人、今迄幾人かの好き人に恵まれましたが、その幾人かの中で、一番思い出すのが、池山先生、そのお姿、そのお言葉であります。そのお言葉が、一番私の心に植えつけられています。……（暫し無言）……。

今年こそ参ろうと思いやつとその思いをとげました。今までもそう思いましたが、とげ得ませんでした。

先程業の話が出ましたが、先生は、「業即弥陀です」と言われました。

先生は講演の時「してみようのない自分」とよく言われました。……

私は信仰、宗教を心得て、病気治療の方法に使おうとする、どの程度でも、とに角、念仏称えよ、と患者に云う。私はまるで信仰を職業の道具に使つている。そんなとき、「して見ようのない自分」を思う。……そして自分自身は仲々そうはいかぬのである。

今日は、永い間の思いを果たせて本当によかつた。……（註）全身追憶、自己と好き人々と池山先生と、咄々として俯し乍ら前半生の自分の歴史の中から、撫でて拾い出す一言一句、独語しては又沈黙し、又自己の骨格を独語されました。誠に吾等感銘深いお念仏の三十棒を喰い私の念仏の脚下は痛打を浴びた感でありました。有難う御座いました。

次は井上善右エ門先生のお話であります。

一道会は年に一回、色々と平常聞けないお話を私共より

勝れた古い先生方から伺う事が出来て、天下一品の会であると思うのであります。困つたことにこの会に参詣すると話をさせられる順番が廻つて来ることであります、何か申上げます。

ある本に「誰だつて自分の生れる所を選んで誕生したものはない」と言つていますが、この一句は私の胸を離れませぬ。私共は自分で見た世界にもとずいて生きようとします。吾々は吾々個人々々の集りを人生とか社会とか云つています。その個人々々は各々その行くべき道を考えています。所が個人々々の集りである社会とか人生の中に、個人では解らぬもの、遇然というような出来事がある。吾々個人からは遇然ということしか無いことがある。「誰だつて自分の生れる所を選んで誕生した者はない」の言葉に出会つて異様な感がするのです。

ことに人と人との巡り会いなど、個々の立場ではどうしても分らない、遇然という言葉は、正当に、如実に、そのものを受取つていない。手の届かぬことに蓋をしただけの言葉であり、ことであります。

毎年この会で御住職が歎異鈔を拝読されて『……幸に有縁の知識によらずんば……』の所で息がつまられる。この「幸に」の一語に宿されている御心それは悟性の立場、客観的に世界を思念する立場ではなく、世界と個の私とが交わる立場とでも申しますか、そこがここに秘められてある。

哲学の方面で、カントの目的論的世界の中にいう部分では手の届かぬ世界の深さが語られているが、その深さに交らせて頂く、その道が念仏によつて開かれ与えられてくる感じであります。

先程、名号碑除幕式の時に御住職が、碑建立に到るまでに色々な不思議に恵まれたことを話された、斯ういう不思議—呪術的不思議はいけないが、何かこう遇然に見付つたのでなく「幸いに」賜つた、「幸いに」の語に秘められていることが、ここにも感受されるのではありますまいか。私自身にとつても、好き先生とのめぐり合せと云うことはどうして斯うなつたか解らぬのであります。「幸に有縁の知識によらずんばいかでか易行の一門に入ることを得んや」の歎異鈔の著者の息吹きをヒタ〳〵と感じるのであります。

オリンピックが開催されましたが、この宣言の中に「民族・宗教・国家を越えて、世界の人が一つになる」と云つて居ります。この言葉の中で「宗教を越えて」というが、この宗教は、人間をわくにはめるような響きがある。西洋の宗教は、その宗教史を見ると闘いの歴史であり、災いの葛藤であります。ですから此処で云う宗教は、人間にわく

をはめるのが宗教だとの印象を若人達に与えると思うのです。

然しすくなくとも仏教においては、一つの大きな視野に立つている。或る人は仏教は無我を説くというが、あらゆる宗教は無我を説くのではないかと云います。「われ生くるに非ず、キリストわれに於て生くるなり」というではないかと。然しここでは大いなるものに生かされてはいるがその大いなる者が一つの固定者、創造者であり、矢張りわくを持つています。これからの人類の歴史はこの立場で果して道が開けるでしょうか。

池山先生の御令息が先程お話し下さつた、自分に対して示して下さつた御父さんの大きな懐、これは自分にわくをしているものからは出て来ません。仏教の無我、空の縁起ということは、単に世界の説明であつて、客観的理念であるというが、そんなものではない。弥陀仏、親の心の前に立つ一人子の「場」である。それが大事であります。池山先生が身をもつて示されたもの、学問・理屈でなく仏のいのちであり、その道を身をもつて開いて下さつたものであります。甲斐和里子先生のお歌に

ともしびを高くかかげてわが前を行く人のあり小夜中の道

とありますが、そういう先生に巡り遇うこと「幸に」の一語に宿す無限の深さを思うのであります。

終りに花田先生は感慨をこめて次のように話されました。

このよき日を迎えますについて、私の胸に去来してやみませぬのは聖人の御臨末の御書と呼ばれて居ります法話

我が歳きわまりて安養浄土に還帰すといえども、和歌の浦曲のかたお浪の寄せかけ〳〵帰らんに同じ。

一人居て喜ばば二人と思うべし。二人居て喜ばば三人と思うべし。その一人は親鸞なり……。

であります。これはもとより聖人の御語ではありませんが聖人滅後、聖人をお慕いしてやまぬお弟子達の胸に、聖人の御声として響いてきたものでありましょう。先生の廿七回忌の今日、先生の御声として「その一人は池山なり」と私どもにきこえて参ります……。

さて「池山先生」ときけば「ただ念仏して」と続き、更に「池山においては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひと親鸞聖人の仰せを蒙つて信ずるばかりだよ」とお姿まで浮んで参ります。

或時先生は「いつもたしかなことは地獄は一定ということだよ」と独語せられました。そこに何時も先生が念仏をお味い下さる地盤をお知らせ下さいました。三角形の尖瑞でなく、地獄一定という底辺に常に立たれて念仏申されて

いるのを教えられました。

或時に先生は、

好き人の仰せにききて御名を呼べば喚ばわせたまう御声きこえぬ

と、信のたのもしさを述べられました。日本の津々浦々に念仏の声はひびき、念仏を知らぬ人は無いというまでに普及して居りまして、自然と念仏申される人々も数多いのでありますけれど「喚ばわせたまう御声」の聞えぬ人が多いのではないでしょうか。それは丁度石童丸が、九州のはてからはるばると高野の山にまで、父の刈萱童心をたずねて「父よ、父よ」と呼び続けながら、遂に父の喚び声を聞かずじまいになつた悲惨さと同じでありましょう。

先生は、この頼もしい念仏を終始一貫、そのお生涯を貫いてお勧め下さいました。御身辺の方々で申せば、甲南高校で亡くなられた幸吉さんが、死を自覚されるとともに「今となつてはただ念仏です」と、念仏に帰られ、又御次男の敏朗さんが「敏朗が念仏申すようになりました」とのおことずてに気も狂わんばかりのおよろこびをせられた先生、やがて先生御自身の死を御自覚されると、御次女の愛子さんに「南無阿弥陀仏アイユ」と遺言せられ、友子奥さんに「しつかり念仏するんだ」と勧められながら、六十七才の生涯を念仏の息と共にお閉じになりました。

今日立派に建立されました名号碑の前に立ち、且つその裏に深く刻まれました「オネガヒダカラスグキテオクレヨ」の悲心を仰いで、洪恩を謝しまつることであります。

○

追慕と有難さとで、何もなくなつてお念仏一つになつてしまつたこの二十七回忌は、まだ沢山の方々に御法味を頂きたかつたのですが時間が許しません、惜しいことながら夕暮れの迫るのをどうすることも出来ません。

残る人々はお握り弁当で又夜に入つて法味が続き、白井先生などは、お疲れの中を遅くまで質問に答えて下さいました。

今日までいのち永らえてこの二十七回忌に遭い、名号碑が万世に光り輝きましたことは何という幸慶でありましょう。

誌友の皆さん、ほんとうに有難うございました。一道会記を終るに当り、深く如来の厚恩を謝すると共に、お念仏を申して皆様に厚く御礼を申しあげます。有難うございました。

× × ×

昭和四〇年 一月十日 稿了

人生航海

高原憲

（一）

人を船に、この世を変幻極まりない広海にたとえ、昔から人の一生を船の航海になぞらえているのは当然のことである。新造船が出来上つて未知の広海へ船出するに当り、行われる船出式は人の場合正に結婚式といえるであろう。新郎が船長の座に、新婦が機関長の座について、知友の祝福をうけ難度海へ船出するのである。世の常なる結婚式の馬鹿騒ぎをよそにして、この人生の船出にあたり、新に座についた新郎と新婦が、その夜から二人して考うべき三つの問題がある。これが最も意義ある人生の第一日ではなかろうか。三つの問題というのはこうである。

一、この船の行く手は何処であるか。即ち何処を最終の航海の目標として進むべきか。

二、この船の進路を如何にして定むべきか。即ち羅針盤の用意如何。

三、航海の途上に船が破損して沈没しないようにするには船体の手入れ如何。

この三つの問題が解決していなければ正しい航海は難かしいのであろう。ただ船が優秀であれば足れりと思つている者が多い、航海には誰しも優秀船を望むのであるが、人生航路にあつては誰にもは許されないことである。その人の業縁によつて、各人に恵まれた船によつて航海へ乗り出さねばならない。たとえどんな優秀船であつても、何処に行くべきか、目ざす港もなく、また羅針盤の備付がなかつたら所詮航海は望めない。いよ〳〵難度海へ出て風をさけ浪をのがれて右往左往していたら、それは航海ではない。それは漂流でしかないであろう。人生航海は決して漂流船でも単なる遊覧でもない。目標をさして時々刻々とあらしを乗り切つて進まなければならない。そして一度船出したらこの人生航海は決して後戻りを許されないのである。人は皆いろ〳〵と準備を整えて人生航海へ乗り出そうとしているのであるが、この最終の目標と羅針盤の用意が忘れられている。今日の学校教育の方針でもあろうが、ただ優秀船の建造に全精力はそそがれているのである。人生最終の目標も教えられず、それをめざす羅針盤も与えられず、名利と愛欲の港を目ざして人生航海へ乗り出すのである。これで正しい航海といえるであろうか。この広い難度海には愛欲名利を目ざして進む船のあまりに多くして、途上破損し沈没の悲運に泣く者のなんと多いことであろうか。

人生航海の最終目標は彼岸の浄土であらねばならない。この目標を狙う羅針盤は宗教という羅針でなくてはならない。宗教を無視した今日の教育では当然のことかも知れないが、自分は正しい人生々活をしていると信じているその人の生活が迷いの生活といわれる。法を聞けよと鐘は鳴りひびいても、これを聞こうと耳を傾ける人のすくない世相である。

人生航海の最終目標は浄土であり、それを方向づけるのが宗教という羅針盤であると、宗教家は叫びつづけているのであるが、この重大性が受けとられないのは、御縁が恵まれてないからであろう。

この一と二の問題を宗教家でない私が、これを私なりにどんな風に受けとつているかを先ずふれさせて頂いて皆さんの批判をうけたく思う。

私の父は真宗寺院の二男であつたが、若い頃から俗人であつた。お粗末な木箱を仏壇として朝な夕な拝んでいた姿は子供の時から印象深く残つている。子供の頃から弱かつた私は、妙に医者となつて強くなりたいと願い、医学を志した。当時新渡戸稲造校長にあこがれて一高三部に入り、思いもよらず仏縁に結ばれた。当時一高徳風会という宗教的な会合の講師であつた近角常観先生の御教化をうける身となつた。人生航海の羅針盤を頂く御縁となり、彼岸をさして人生方向をどうやら決定させて頂く身となつたことは学問を身につけるにはあまりに頭が悪かつた私には何と有難いことであろうか。人生航海の終りに近付くに及んでますます嬉しいことである。明日ありと知る由もない私は、無病息災で百年の長寿を願いつつも、夜ともなれば人生最終だと思い、今日までの生を感謝し、念仏のうちに深い眠りにつかせて頂くのである。幸に翌朝を恵まれたら、今日一日を生き抜かせて頂くのである。「明日ありと知る由もなき我なれば今日一日を生きぬかんと念う」。

永い間、仏の存在も、浄土の有無も、私には不可解であつた。聞法を恵まれている私がこの有様であつた。私が五十幾歳になるまで両親を恵まれた私は、いやという程やる瀬ない親の姿はこの眼で見届けていた。然し私には親の真実の心など知るよしもなかつた。この眼で仏をたしかめも出来ない私に、仏の存在も、浄土の有無などについても、全く知ることを許されなかつたことは当然なことであろう。一高時代からこのかた私は幸に聞法の御座を恵まれた。これはたしかに奇しき御縁であつた。私が子の親となり、親としてのなやみを知らされて行くうちに、衰え行く

親の姿を通して親心の有難さを味わせて頂く身となり、そしてこの相対界の親心を通して絶対の仏心に触れさせて頂いたのである。全く手間のかかつた諸々の御縁であつた。

一人の従妹がいた。彼女は早く父を亡くしたが、一人の母親に叛いて或る男の許に走り、数年後母親の許に帰つて来たが、その時は肺結核の重症の身であつた。其後間もなく危期に陥つたことを聞いて、私は福岡まで彼女を見舞に出かけた。いろ〳〵と話をしているうちに、彼女は

「お母さんを拝んでもよろしいか」ときくのである。

「かねて親不孝の限りを尽しているあなたであれば、思う存分拝ませて頂きなさい」

と答えると、彼女は血肉を分けて貰つた母親を静かに拝み出した。いつの間にか彼女の口から念仏が流れて来た。やる瀬ない母親の姿を通して、彼女は真実の親心に触れ、そのまま仏心に目ざめさせて頂いたのである。そして念仏のうちに彼女は安らかに大往生の素懐をとげたのである。

六才になる少年を診たときは、彼はすでに重症の肺結核であつた。彼の母は三ケ月許り前に結核性脳膜炎で入院して、間もなく亡くなつたが、彼の母の最後についてはその少年に一切秘せられて、彼は淋しく病床についていた。この少年がいよ〳〵最後に近づいたので、私は彼に

「誰が一番すきか」と訊いた。母の入院以来一度もお母さんと呼んだこともなかつた彼は、かすかに、

「お母さん」と答えた。

「君もやがてお母さんが待つていなさる処へ行くよ」

と云うと、彼はかすかにほほえんで、そのままお浄土参りをした。彼はたしかにお浄土で母に、否仏様に抱かれていると思う。

私の弟三人も信心深い父上に導かれ、静かにお浄土に召されて行つた。そして私の来るのを待つているであろう。私は周囲のもろ〳〵の善知識を通し、又奇しき聞法の御縁によつて私の人生方向もどうやら決定して今日一日の航海をさせて頂いている。暴風雨の日には船の進路は狂い勝であるが、お念仏を私の命のコンパスとして、方向を定めさせて頂いている。近角先生からいつも聞かされていたように「跡戻り〳〵して辿るらん甲斐なきことに心惑いて」全くその通りである。

医者として私は可成り多くの人々の最後にあわせて頂いた。かねてたくましい人生航海をしているという人のみじなめ最後に出会うと、漂流船であつたかなと淋しいことがある。ある老僧の肺結核の末期によばれて行つたことがある。「聞きたいことがあれば今のうちに聞いておくように」と家人に告げると「そんなことを云つて力がなくなつたら」と云つてためらつた。其夜いよ〳〵最后が近づいたので家族の人が、何か聞こうとすると老僧は「自分はまだ死なない、仕事が残つているから」と云つて、そのまま息をひきとつたそうである。お浄土に召さるべき人の、かかるかなしい船の沈没の痛ましさを知ると、私はいろ〳〵と考えざるを得なくなつた。

人生航海の最后の目標が決定していると否とにかかわらず、船が航海の途上沈没する姿を人の場合病死と云うのである。生あるものは必ず一度は死するのであるが、人は病死するのを不思議とも考えないほど常識のようになつている。勿論交通禍の犠牲になる人も多い。人の病と戦いこれを治し、又病死せんとする人を救う仕事を医者のつとめだと信じて、四十幾年も町医者として働いて来た。「病は天が治し、御礼は医者が貰う」といつた医聖ヒポクラーテスの言をきいたときは、おかしなことを言うものだなと思つていたが今日御礼だけを貰うのが私だと解つて失望した。「医は自然の輔佐のみ」という古人の言もきいた。科学は日進月歩して月旅行も夢ではなくなつて来た。医学も進歩して生命の神秘の扉を一つ一つ開いて行く人間の力にうぬぼれていたが、科学がどんなに進んでも物に関するだけのことであり、生命の神秘には一指も触れ得ないのである。「病は早期に診断発見して早期に治療せよ」と叫びながらガン学会の有名な指導者たちがガンでたおれて行くのである。

私は毎朝新聞を開くと、先ず紙上に出ている著名人の死亡欄を見る。五十、六十歳になると多くは成人病でたおれて行く。しかもその中に医者がいると、私はつく〳〵と考えるのである。人は病死することなく即ち人生航海の途上沈没する船とならず無事にお浄土へ到達することは出来ないものであろうか。病を早期に診断発見して早期に治療する努力の外に、人間が天寿を全うするまで無病息災で人生航海を続けて行くことはなぜ考えないのであろうか。それは人間の無駄な願であり不可能なことであろうか。

私は最後に、人生航海の途上、船が不幸破損し沈没することなく、彼岸の浄土へ無事到着すべきであると信じて第三の問題を考えて見たい。

（二）

私が町医者となつて四十余年になるが、開業当時疫痢という小児の伝染性疾患が猖獗をきわめて、小児の生命をおびやかしていた。生水を飲むなど全く御法度で、素人は勿論医者もこれを厳禁していた。本来生水を欲しがる小児が熱で渇を訴えるので、好期を逸せず私は疫痢患者に生水を飲めるだけ飲ました。すると死亡率の高かつた疫痢で亡く

なる者が激減して来た。一滴の水も飲まさずに愛児を疫痢でなくした母親は、墓に水を浴びせて愛児の冥福を祈るほどに水への関心が高まった。水医者の綽名を私が頂いたのはこの時からである。

勿論熱病ばかりでない。自然の空気をそのまま吸うのと同様に、自然の水を飲むことが生命の元である。水にはカロリーが無いと云って、生水を嫌うほどにカロリー学説は今でも学者は勿論一般にも有難がられている。汽罐に石炭を多く投入すればそれだけ汽罐は力を出すもののように考えられている。食欲のあるなしに拘らず、石炭ともいうべき食物をうんと食べようとするのが今日の常識である。煙筒を忘れた汽罐では石炭は燃えないように、水を飲まないで体内の毒素の排泄を忘れては食物も燃えないのである。一方の動物には水だけを与え、他方には所謂栄養物だけを与えて水を与えない動物実験では、水組の方が体力の続く限り元気で、他方よりも長生きするのである。

戦前玄米菜食を唱く人があった。人も病も食物も陰陽の二型に分けて、陽性の人は陰性の食物をとり、陰性の人は陽性の食物をとれという健康法であった。何も知識もなく本能的に生きている自然界の動物の無病でたくましい姿を見ると、あまり知識のいる健康法はうなずけなくなってしまった。

日本医界の最長老、二木謙吉先生の「健康への道」を読んだのは戦後十余年を経てからである。所謂健康法でなくて、人が生涯辿らねばならない「健康への道」というのが私には魅力であった。その序文の中で先生はこんなに書いていられる。

「今日の医学は完全正食を無視した医学である。完全正食とは、蚕に桑の葉、鶴にどじょう。鷹に雀、猫にねずみ虎にうさぎ、日本人には玄米菜食で、それでこそ天地は生々化育で、人は自然順応で、天地に矛盾なく、人生に病なく、人は無病長寿、百歳平均の天命を全うして、無病・無苦・無痛・安楽な死をとげることが出来のである。

ところが今日の医学は、今に精白した米に依存して、その不完全を肉、魚、脂肪、菜果で補充しようとしている。それがため、人畜は多く病にかかり、体位は低下し、人は抵抗力の減弱をきたし、胃腸病、呼吸器病、神経系統疾患、賢臓病、伝染性疾患をひきおこし、みな苦悩の多い病的死をいたし極度に死をきらい恐れるようになるのである。」

これ正に医学者としての先生のなげきである。そして先生の著書を精読しているうさに、「生命なき食物は生命の糧とならず」という先生の御持論がうなずけてきた。「自

然にすきになり、自然に健康になり、自然に経済的になり自然に長寿する」という先生の完全正食が、玄米と野菜である。先生はカロリーを論ぜず、白米という粕をやめて食い改めよと説かれるのである。何のはからいもなく師教随順して、私がよき人の素食生活を精進すること八年余になる。二十才まで極めて病弱であった二木先生は徴兵検査官から一喝を喰い、その翌日から麦飯と野菜食にきりかえ次いで玄米野菜の素食生活を精進して今年九十二才になられる。その間無病息災で元気壮者を凌ぐのである。一日朝一回だけの食事で四十余年を過されている。夜はいつ床についても朝三時には起床し、五貫余りのリュックを背負つて、雨の日も風の日も二時間ほど歩き廻り、帰つて冷水浴をして軽く玄米めし一椀と二分間だきの野菜をかなり沢山とられる。調味料は用いられない。（「完食にして正しい食物」という先生の著書を御参照下さい）味増汁は用いられない。自然の正しい食物をとるものには、人工的な食塩は無用で、自然にとられる塩の外、余分の食塩は却つて病因となるのである。

昭和のはじめ東京女子実践学院で二木先生の教をうけた人がいる。当時若かりし美髭の先生は講義中教壇に立つたままで玄米の功徳をたたえられた。外にもう一人先生の外に東大の教授が来られた。その先生はカロリー礼讃をして蛋白質の重要性を説かれた。その方はカロリー礼讃者だけに、体は肥満し、講義中は椅子にかけられた。講義のあとで何れが本当であろうかと面喰つた当時の生徒は、今になって二木先生の方が本当であったと述懐している。肥つた先生は早くたおれ、玄米野菜の二木先生は九十二才の今日まで元気である。

私が二木先生について素食をはじめた八年前、悩みがあつた。左上搏の神経痛、臀部の慢性湿疹と、九本残つていた上歯のうち二本が動いて、何時抜歯したものかと思い煩つていた。終戦後急に眼底に出血したので血圧を計つて見ると一八〇であった。それでも薬は何も用いなかった。朝食に玄米めし一椀、野菜の二分間煮きを可なり多量、味増汁は用いないで水を飲む。昼は水だけ、夕方に野菜と酒五勺、玄米めし一椀で水をのむ。一二年のうちにいつの間にか私の宿痾はなくなり、歯も動かなくなった。血圧は一四〇——九〇となっているので驚いた。私は終戦後毎朝の冷水浴の外は殆んど何も運動しない無精者であった。

完全正食で人は寿命百才まで無病息災で安楽な自然死をとげるのだという二木先生の理念の如く、私もかくありたいと念じている。然し毎夜やすむ時には、幸に交通禍の犠牲とならず、今日まで無事に生かされたことを感謝し、念仏のうちに今日一日の生命を終らせて頂くのである。「明

日ありと知るよしもなき我なれば今日一日を生き抜かんと念う」私は「彼岸まで無病息災願いつつ今日一日を素食に生きん」と日々願うのである。

二木先生はカロリーを説かず、正食をすすめ常に過食をいましめられる。今日の学者はカロリーを健康の基となし日光、空気、水及び食物の生命の四元のうち、食は我国自然の食から全く一変してしまった。私の栄養失調をおそれて高級な動物性蛋白質をすゝめる学者もいられる。完全正食を無視した医学を舞台としてこの地上の人々は本能を越えて享楽食をむさぼり、学者も美食即栄養と断じて、地上の人は食料のために多大の費用を投じ、却つて人は病弱となり、成人病にたおれて、その生活は益々不幸となって来た。地上一切の悪は食よりはじまると私は信じている。

最近肺ガンの因を巻煙草にありとする説が出て世の中を騒然たらしめたが、二木先生はガンは勿論万病悉く邪食に基因すると説かれる。一切の人事と同様、万病自業自得である。病の早期発見でなく、自然死によってたおれるまで無病息災で一生を過ごす長寿の道は果して無いものであろうか。

万病一元と東洋医学ではいう。いろ／＼な病因と戦う今の予防医者達にはおかしなことであろう。ガンは勿論一切の病は皆同一の元によって起るというのである。

ここに朝顔の種子あがる。この因なる種子を机上に何年放置しても、果である芽は出て来ない。この因なる種子を地中に埋める、季節があり、又土地の条件がよければ、因なる種子から朝顔の芽という果が出て来る。この因以外の条件を縁という。因から果が直ちに出るのではない。因に縁が仇いて果となり、ここに因縁果の方則が成立するのである。万病一元という元は縁のことであつて、縁が仇いて病という果が出るというのである。日々の人の邪食が万病を起し易い縁を作つているのである。病原菌が体内に侵入しても縁がなければ発病しないのである。ガンという難病も縁がなければ、体内の突然変異によって正常の細胞が悪性のガン細胞となることはない。人の死病の王座を占める成人病でも同様で悪因悪果で、自業自得である。完全正食によって人は無病息災で長寿を得るばかりでない。不幸成人病があっても自然に治癒するものである。

ある家庭に娘がいた。その娘が近所のドラ息子のために堕落したとする。親達はドラ息子の退治にかかる。今日の予防医学のあり方である。私はこの娘の堕落は娘の中に縁があって、これがドラ息子の手によって果を生じたのであると思う。どんなにドラ息子の退治をしても仕方がない。どんなにしても地上に病が起るのである。娘さえシヤンとして内に縁がなければ世の中のドラ息子と遊んでもよいの

である。

この地上を久遠の楽園たらしめるは極めて易いことのようであるが、この地上は結局娑婆でしかない。科学は日々進みながらこの地上は善きことだけは行じ難く、必ず正しからざることが横行するのである。「煩悩具足の凡夫火宅無常の世界はよろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに」という歎異抄の悲句はこの世の実相である。教団人は人生の方向と羅針盤の重要性を絶叫しながら、人生航路の第三要件である船体の手入れを説かず、聖人も肉食妻帯を許したのだと安易に考えて、彼岸の浄土に到着することなく航海の途上、あたら難波沈没の悲運にたおれ行く相を無常の娑婆と説いている。日々美食という邪食を追うている真宗教団の反省を切に求めたいのである。

素食生活者を単なる理想主義者だと笑う人もある。四十年来エスペランチストである私は、「自国内では自国語を、他の民族との間では共通でしかも中立的な言葉として国際語たらしめよ」という理念に共鳴している理想主義者である。口には完全正食をとりて彼岸まで無病息災でありたい。耳には正しい法を聞き、之を生命の羅針盤として人生方向を決定したい。人は何処へ方向を決めようとも、私共同志は自らをつつしみ、生涯を生体実験にささげて今日一日の人生航路を決定して行きたいものである。

シュワイツァー博士の悲劇

〈朝日夕刊〉

黒人との交際には親しみと権威を結びつけることが大切で「わたしはお前の兄弟だ、だが兄だ」という言葉を私は作り出した——（一九二〇年シワイツァー）

右はアフリカで医療救済のために尽している老博士の四十五年前の言葉だが、カボンが独立して以来、周囲の事情も変化し、黒人のインテリの中にはこの古い言葉を根にもって博士に楯つくものがいるという。……

アフリカの慣習ではこれは、弟（黒人）が兄（白人）に無理に支配される意味だそうな。もし博士がその気になれば病院を近代化する力も金もあるはずだ。旧式な現在の病院はカボンの近代化をはばんでいる——といってまるで仇敵のように非難するものもいるそうな。

後進民族の汚名を返上したい性急な気持から勝手なことを言うと高橋博士は嘆いている。これを読んだ友人も、老博士もついに報われないのかと慨嘆してその雑誌を伏せた

だが、これは老博士を貫ぬく基督教的人道主義の最後の壁ではなかろうか？。どこかに「愛してやる」といった心の驕りが抜けきらないものだ。私は老博士の偉業を讃えるが、しかし老博士が遂に良寛でなかった事実を直視したい。

あとがき

陽春三月が参りました。卒業、試験、入学、入社と若い人々の総計算期であり、新出発の春でもあります。それにつけましても人生の真目的を確立して着々と進んで頂きたいものであります。それにつけましても、正信偈の

如来世に興出したまう所以は
唯弥陀の本願海を説かんとなり。
五濁悪時の群生海

まさに如来如実の言を信ずべし

との御勧めこそは、九十年の生涯を貫ぬいての親鸞聖人の御願いでありました。

二月にも井上善右工門先生をお迎えした時のお話に「信教の自由は、無信仰の自由までを含めているが、果してそれでよいのだろうか。草木に根の自由を認めるということは根が無くともよいということではない」等々、現下の日本にあつて深く省みねばならぬことを知らされました。

○

一道会の記は、各方面から待望の声を聞いて居り早くと願つておりましたが、刑務所の移転等のことがありまして印刷がおくれ、今回に続きました。表紙裏に名号碑を掲げ御紹介申し上げました。

○

白井先生が二月初めに上桂駅でおころびになり、頭骨にヒビが入るという御怪我をせられましたが、内出血もなく三週間余りで退院せられましたことは不幸中の幸と存じます。今後もおさわりが残りませぬようにと祈念申して居ります。

○

昨秋加藤正雄さん、松江岩人師の急逝、本年に入つてからは山科雲嶺師、広田宇作さんの死去、また成田夫人の重病、伊藤さんのガン再発等々きびしい風が吹きすさんで居ります。

「一度のちがいが一期のちがいなり」の蓮如上人のお声を身をもつてお知らせ頂くことであります。茶道では「一期一会」の心構えを根本としての修行ときますが、そうありたいというような生やさしいことでなく、現実そのものがそうであると身にしみることであります。

御案内

毎月才一、二、三日曜、午后一時半、
※一道会例会。
市電新郊通り一丁目下車東へ一丁半入る。

毎月二十四日午前午后、
※昭和区小桜町教西寺法話会。
市電御器所通り下車。桜花学園東。

四月八日午后一時半、
※尾西寺三条板倉、蓮光寺修道会。
歎異抄講仰。

× × ×

慈光第十七巻第三号　昭和四十年三月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

定価　半年　二百円（送共）
　　一年　四百円（送共）
編集・発行人　花田正夫
　　愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　本田政雄
　　名古屋市南区駅上町二ノ八八
発行所　慈光社
　　振替口座名古屋一〇四七〇番